

# ●モノグラフ小学生ナウ



## 家庭学習(その2)

vol.3-7

©1983(株)福武書店 教育研究所/加藤智博  
東京学芸大学助教授 深谷和子・船橋市立高根台第一小学校教諭 新井 誠



### 目次

特集／子どもと能力	2
調査レポート／家庭学習(その2)	
要約	6
1. どんなふうに勉強しているか	8
● 1日の家庭学習時間	8
● 学習塾通いが54%	10
● どんな勉強をしているか	11
● 予習か復習か	13
● ドリルの使われ方	15
2. 勉強の自立	18
● 親とのかかわり	18
● 目標を決めているか	19
● 意外にマジメな勉強ぶり	23
3. 成績のよい子、悪い子	24
● 一般化した塾通い	24
● 成績と予習・復習	26
● 何を勉強しているか	27
● 学習態度について	28
● 自発的に勉強する子ども	29
4. 勉強している時の気持ち	31
● その胸のうち	31
● 親への要求	33
まとめに代えて	34
シリーズ/子ども考現学 子どもの姿・昔と今(17) 学習塾	35
資料1・調査票見本	40
資料2・学年・性別集計表	46

特集

# 子どもと能力

東京学芸大学助教授 深谷和子



## 能力に優劣はあるか

非行少年の補導に当たっている人びとの座談会を読んでいたら、こんな一節がでてきた。「彼らの口をついて出るコトバに、自分は頭が悪いから、っていうのがあります。どの子どももみなそう思っているみたいです。どうせ自分は頭が悪いから——そこで一切の向上心をなくしてしまっているみたいなのです。ところが実際に彼らの頭は決して悪くない。ただ、悪いと思って自己限定してしまっているだけなのです。これを何とかしなければならぬ」

能力の問題というのは、子どもたちにどう教えたらいいのだろう。子どもたちに教えていると、能力の優劣は、残念ながら、一人ひとりの中にしっかりとある。私は大学院も含めて学生時代が長かったから、ずいぶん多くの子どもの家庭教師をやった。今は、成績がよくてももっとよい成績を、と願って家庭教師をつける向きもあるようだが、昔はそうでなかった。家庭教師と言え、たいていの場合ひどく成績の悪い子につけられた。だから1人の子に3年も4年も、週に2回も3回も通いつづけては、そのできなさに関し、しかもあまり成果を上げられなかったという思い出がいくつもある。

ある男の子は、とても素直でよく勉強する

いい子だった。小学校3年生からその子を見たのだが、残念にもその子はいくら教えても、さっぱり覚えてくれなかった。オール2に近い成績で、とくに主要4教科が苦手だった。若かった私は、何か1つでも自信をもたせたい、よい成績をとらせたいと、悪戦苦闘した。ご存知だろうが、成績がからっきしダメ、という子に、手っとり早く100点をとらせなかったら、まず「書き取り」をやらすことだ。出題の範囲もだいたい決まっている。正確に覚えさせれば、応用力もいらない。

ある日のこと、翌日書き取りのテストというので、私はいつになく遅くまで残って、何回も何回も、出題範囲の漢字を覚えさせた。たった30字かその位を覚えるのに、3時間も4時間もかかったのだが、その日はそれ以外の勉強を教えなかった。どうやら完ペキに近くまでこぎつけて、私の出すどんな漢字も書けるようになったので、私はほっとして帰宅した。

次の家庭教師の日、私は勇んで出かけて行った。子どもの顔を見るなり叫んだのだ。「どうだった？ 漢字のテスト。100点だった？」あれだけ反復勉強したのだから、100点以外をとるはずがないと思ったのだ。ところが彼は、ちょっと顔をゆがめて、何とも形容のできない表情をしたのだ。「え？ 間違っただけ？ 見せて」彼のとり出した10題の書き取りのテストは、無残にも50点だった。間違っただけのところを見ると、どれもこれも昨日、あれほどくり返し書いて覚えて、どうやらパーフェクトに書けるようになったものばかりではないか。一晩寝ただけで、どうして、2本の棒が3本になり、木へんが手へんになってしまうのか。

ところがさらにもう一つ、私を決定的に打ちのめしてしまうようなミスが、見つかったのである。「かてい」という熟語だった。昨日さんざん苦勞した「家」も書けている。「庭」もちゃんと書けている。それならできてはいるはずなのに、何と彼は、「庭」を先に書き、その

下に「家」を書いたのだ。「庭家」。これを彼はおかしいとは思わなかったのだろうか。

能力のテーマに出逢うと、私はいつもこのエピソードを思い出す。彼も私も懸命に努力した。しかし、その結果の「庭家」である。人間にはできることとできないこと、得意なことと、どうしても苦手なこととがあるのだと思う。そしてこのことで、彼も深く傷ついたに違いない。あれほど先生が教えてくれたのに、また50点しかとれなかった。そのことが彼のあの言いようもない表情を作らせたのだろうか。

## 不注意も能力のうち

ふり返って見ると同じようなことは私自身にもある。私は小学生時代、ケアレズミステークの名人だった。たとえば、足し算と引き算が上半分と下半分に並んでいる問題だと、ずっと足してきて、引き算になってもまだ足し算を続けて終わりまで、式の大ボカをやるのだ。むろん計算間違いもするし、答は出たのに、かんじんの答を、答の欄に書き入れる時に、そこで書き間違える、などというミスもしょっちゅうした。父や母からは、「和子は不注意だから」と叱られ、必ず見直しをするようにときつく言われた。ところが、2回も3回も見直しても、ついに発見されないミスというのが必ずあるものだ。いったん思い込んでしまったものは、そのまま正しく思えるものなのだ。

そのことで私は長いこと苦しんだ。「不注意な人間」というレッテルはとてもしやだった。なんとか逃れようとしたのだが、どうしても逃れられなかった。しかし、大学へ入って心理学をやるようになり、自分を客観的に見ることができるようになってから、ある日ふと、「そうだ、自分には算数の能力が低かったのだ。算数に関して、頭がわるかったのだ。不注意も能力のうち。なあんだ、そうだ

ったのか」と思い当たったのだ。その時から気持ちがずーんと楽になった。それならそうと早く言ってくればよかったのだ。それを不注意だ不注意だと、態度や性格の問題にされてしまっていたことが、いかに私を苦しめたのか。その部分の能力が低いのは、私のせいではない。生まれつきのせいで、私の努力が不足していたわけではないのだと思ったとたん、気持ちがハレバレとしたのである。

そうした個人的体験があるものだから、私はその後も折りにふれて見聞する先生たちの行為、つまりできない子に、「努力が足りないから」「不注意だから」と言ってはげまされる行為を、うさんくさいものとして見るような習慣がついてしまっているのである。自分の能力の不足な部分は不足な部分として、しっかり子どもに把握させることのほうが、子どもの努力を否定する(努力しているのに、いつも、まだあなたの努力が足りないからダメなのです、と言われつづけること)よりも、子どもを支え、かえってやる気や努力を生むことにならないだろうか、と考えていたのである。

そのことを何かの折りに口に出してみると、たいていの先生からはそのつどきまってこういう返事が返ってくるのだ。「おっしゃることはわかりますがね。子どもに、君ができないのは、君の頭がわるいからなんだよ、なんて言えますか。子どもがやる気をなくしてしまうでしょう。だから私も、少ししらじらしいとは思いますが、努力や態度のせいにして、子どもをはげましているんですよ」

たしかに言われてみれば、「君ができないのは、君の頭が悪いから」なんてセリフは、いかにもまずい言い方だ。これだけは言っただけではいけないコトバの一つに入るかもしれない。しかし、だからと言って、「努力が足りない」で、言いくるめられるものだろうか。あとになれば、子どものほうでそのウソに気づき、かえって教師への信頼感をなくしてしまうこと

にならないだろうか。

## 得意な分野への働きかけを

自分は、この部分で人と違う(例えば劣っている)という「他人との違いを認識し、その違いに耐える」ことは、アメリカやヨーロッパの人びとのほうが、ずっとたやすくやっけるようである。アメリカの小学校で、国語や算数の促進学級(治療学級)で学ぶ子どもたちを見ると、特別なクラスへ入れられていることで子どもたちが傷ついたり、劣等感をもつようになりはしないかと、はじめのうちひどく気になって、よく質問をしたものだ。ところがそのたびに教師たちから返ってくるコトバは、「だって、自分たちが遅れているから、特別に授業してもらっているのでしょう。どこがおかしいですか。遅れているのに、他の子どもと同じクラスで学ぶことのほうが、おかしいではありませんか。むろん子どもたちだってそう思っていますよ」のようなものだった。

考えてみると1人ひとり、髪の色、目の色、皮膚の色の違いはむろん、話すコトバも宗教も、生活習慣も、むしろ違っているのが当然という民族では、自分と他人との間に、能力や個性の差があっても、これまた自然に受け入れられるのだろう。しかし同じ髪の色、目の色をして、同じ言葉を話す日本人の場合、「同じ」がふつうであって、「違うこと」はふつうではないことになる。つまり「違い」に耐えられない弱い自我の持ち主が、われわれだということになるだろう。だから、能力に個人差があるということは、公に発言するのはタブーになってしまっているのだろう。しかしそういう風土の中に住むとは言え、このままでいいのだろうか。いわば「同一幻想」とでも言うべきものにひたっていていいのか。この疑問はまだ私の中で解決されぬままにある。

はじめに引用した非行少年たちの「自分は頭がわるいから」の文章に出逢った時も、だから実はドキッとさせられた。他人と自分では、能力に違う部分がある、ということ教えると、こんなふうに「だから自分は何をやってもダメなのだ。マトモなことはできっこないのだ」となってしまうのでは、どうしようもなくなる。



しかしそのあとで、ふと自分の昔のことを思い出した。「自分には算数の能力がなかったのだ」という自己理解が、なぜ私を解放したのか。なぜ「自分の頭はわるいのだが、何をやってもダメに違いない」のようなマイナスの方向に働かなかったのか。

原因は2つあるように思う。1つは、私が「ダメな部分」ばかりでなく、「すぐれた部分」にある程度の自信をもっていたからだろう。計算はよくミスしたが、文章題の、しかもクイズ的な問題を考えるのは、得意だった。だから、数学は苦手、数学的才能は劣る、と思っても、その中で、ひそかな自負心をもつ余地は残されていた。しかも、その時私は大学の心理学科に入っていた。数学的頭脳はわるくても、私は数学者になるわけではない。心理学の中でも比較的数学を使わない領域をえらんで行けば、自分の道は開けるに違いない。そうした確信が無意識のレベルであったから、自分は算数の能力が低かった、という理解が、むしろ自分の特徴を浮きぼりにした感じで、うまく働いたのだろう。

もう一つの原因は、私の年齢かもしれない。違いに耐えるだけの力が備わった年齢に達していたからよかったので、これを小学生の段階で理解させたら、どうなっていたかはわか

らない気もする。

自分がなぜ思ったような成績を上げられないか。そのことを子どもにどう把握させたらよいか。これは私の中で、まだ答の書けない答案用紙のようなものである。しかしおぼろげながら思うのは、できない部分にとらわれて、ともすれば全面的な自己否定をしがちな子どもに、教師として、もっと他のすぐれた部分を発見させるような教育的働きかけが必要だということだ。20数年前の私を振り返ってみると、「庭家」坊やは、4教科はドン尻だったが、体育や図工はまあまあの成績だったし、何よりも愛すべき人柄の持ち主で、私はこの子に教えることがとても楽しかった。そうした心の動きさえあれば、教師とのきずなを支えられて、子どもは、自分を見失わずに行けるのではないか。それが苦手なく（能力がないとさとした）領域でも、努力を放棄せずすむ大きな要因となる気もする。そしてさらに、苦手な部分の作業には適度の時間配分をして、すぐれた部分を伸ばすために時間を使う。そうした思い切りのよさのようなものも必要だし、それを周囲でアドバイスしてやることも、時には必要かもしれない。

## 調査レポート／家庭学習（その2）

東京学芸大学助教授 深谷和子  
船橋市立高根台第一小学校教諭 新井 誠

「テレビばかりみてちっとも勉強しないのですがどうしたらいいでしょう」、「机には向かうのだけれども、しょっちゅうソワソワ、キョロキョロして、じっくり落ち着いて勉強に取り組めないのですが」、「どうしても自分から勉強する気がおこらないようなので、学習塾へでもやりたいと思うのですが」

家庭学習をめぐる、親たちから担任に寄せられる相談の内容は、時と所を問わず、皆似かよった種類のものではなかろうか。

親も担任も、そしてむしろ子どもたち自身も、少しでもよい成績をと願わぬ者はないだろう。しかし現実には、40人の子どもがいれば、それぞれの到達度はそれぞれに違い、成績の開きは、いつのまにか残念ながら大きく上下に広がってしまう。その成績の格差を少しでもちぢめるためには、家庭学習をがんばることが、一つの解決の方法ではないかと、誰しも考えるだろう。ところが親や担任の願

いに反して、子どもたちは、なかなか思うように家庭学習に取り組んでくれない。授業中の学習ぶりからくる到達度の差を、家庭学習への取り組み方のバラツキで、逆に一層広げてしまっているのかもしれない。まことに困ったことである。

本レポートは、3年前に刊行された（vol. 1-1 家庭学習について）小学生ナウの内容を、一部に新しい設問を加えながら、再調査したものである。全体として、得られたデータは、3年前と時期もサンプルも違うのに、ほとんど動いていない。したがって直接3年前のデータと比較しながら考察をすすめることはしないが、読者の方で、ご関心がおありなら、前回のデータと比較してお読みいただければ幸いである。子どもたちの家庭学習への取り組み方の中に、効果的な指導の手掛りがいくつかでも得られればと願っている。

### 要約

#### ① 通塾率

学習塾に通う子どもは全体の54%。  
成績の差や学年差はわずかである。  
また塾に通う子どもたちで、塾の学習をしていく子どもは、わずか4割に過ぎない。（図5・図7・図26）



## ② 書き取りと計算練習

家庭学習のうち、いちばん子どもたちがよくやっているのは、書き取りと計算練習であり、ついで読書と楽器の練習が入る。(図9)



## ③ よく使うドリルは算数と国語

子どもたちがよく使うドリルは、算数と国語。逆に理科と社会のドリルはあまり活用されていない。またドリルをやったあとで、答え合わせを「必ずする」子どもは、半分弱。けっこうやりっ放しにしてしまう子どもが多いようである。(図14・図15)

## ④ 勉強の時間割について

1日のうちで、何時から何時までは〇〇、そのあとで〇〇のように勉強の時間割を作っている子どもは1割、また1週間の時間割を作って勉強している子どもも1割でしかない。(図23)



## ⑤ 成績のよい子の勉強ぶり

成績のよい子どもは「宿題がなくとも自分で勉強をする」「わからない問題があったら、参考書等を使う」「勉強したことをノートにまとめる」などの点を中心に、成績の悪い子どもと学習のしかたに大きな開きがある。(図27・図28・図29・表2・表3・表4)

## ⑥ 外遊びをもっとしたい

家に帰ってからもっと外で遊びたい子どもは67%、もっとテレビを見てのんびりしたい子どもは51%にも達する。(図32)



サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	292	295	587
5年	325	310	635
6年	306	321	627
計	923	926	1,849

調査概要

対象●東京・千葉・神奈川の小学4・5・6年生  
 時期●昭和58年5月  
 方法●学校通しによる質問紙調査

# 1. どんなふうに勉強しているか



## 1 日の家庭学習時間

子どもたちは、学校で毎日ほぼ5～6時間の学習をしてから、家へ帰っていく。10歳や12歳の子どもの、この時間はかなり長いという気もするが、さらに家に帰ってから、その上またどの位の家庭学習をしているのだろうか。

図1は、塾のない平日の家庭学習時間である。4年生5年生では、学習時間量は大差がないが、6年生になると30分位しか勉強しない子どもの割合は大きく減り、逆に1.5時間以上勉強する子どもの割合は、4年生5年生ではほぼ20%だが、6年生になると2倍の40%に増える。しかし見方によると、「勉強しない日のほうが多い」と答える子どもの割合は、各学年とも7%前後で、やらない子どもはいつになってもやらない、という結果もでてくる。また男子と女子では、巻末の集計表に示

した通り、男子の方が分散が大きい。つまり女子は一樣にわりとマジメに勉強する子どもが多いが、男子は、ほとんど勉強しない子どもも3時間以上の猛者も、いずれも女子より数が多い傾向にある。

また図2に示したように、こうした平均1時間から1時間半の家庭学習も、母親から言われないとなかなかしない子どもが多いらしいのは、困ったものである。「自分から勉強する(よくする)」と答えているのは、わずか24%、「ときどき」を合わせても66%。言われないとしない子どもが3分の1ということになる。母親が嘆くのも当然だろう。

ついでに学習の周辺状況を図3・図4で見よう。「自分の机でよく勉強している」のはわずか50%。「たいてい自分の机以外で勉強し



ている」子どもが22%もいる。また机の周辺の整理整頓だが、「よく整理している」のはわずか23%に過ぎず、「あまり、ほとんど整理して

いない」が35%にも達する。子どもたちの家庭での学習習慣の確立は、あまり満足すべき状況ではないと言えそうだ。

図1・塾のない平日の家庭学習時間(宿題を含む)

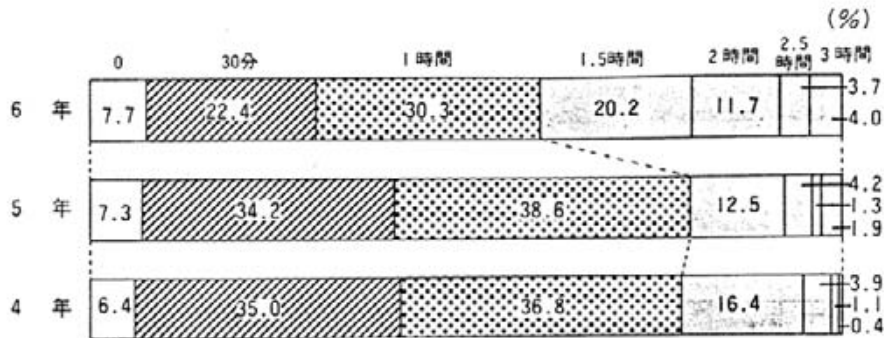


図2・「勉強しなさい」と言われなくても、自分から勉強する

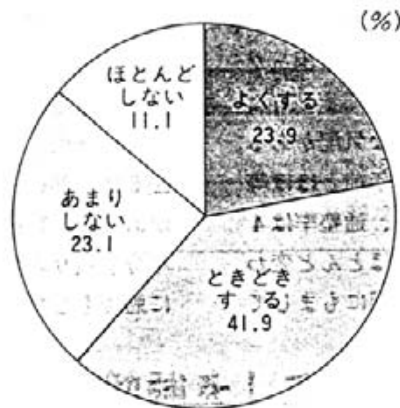


図3・自分の机をつかって勉強する

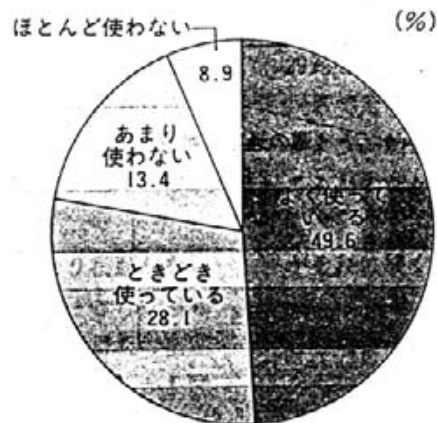
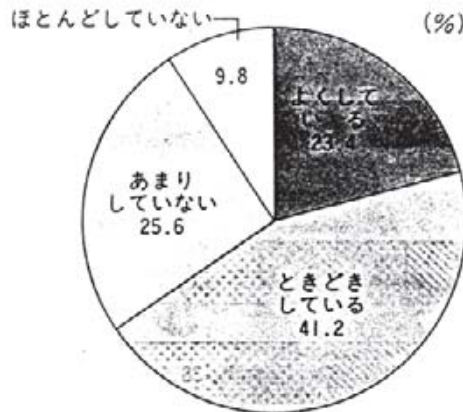


図4・机のまわりの整理整頓



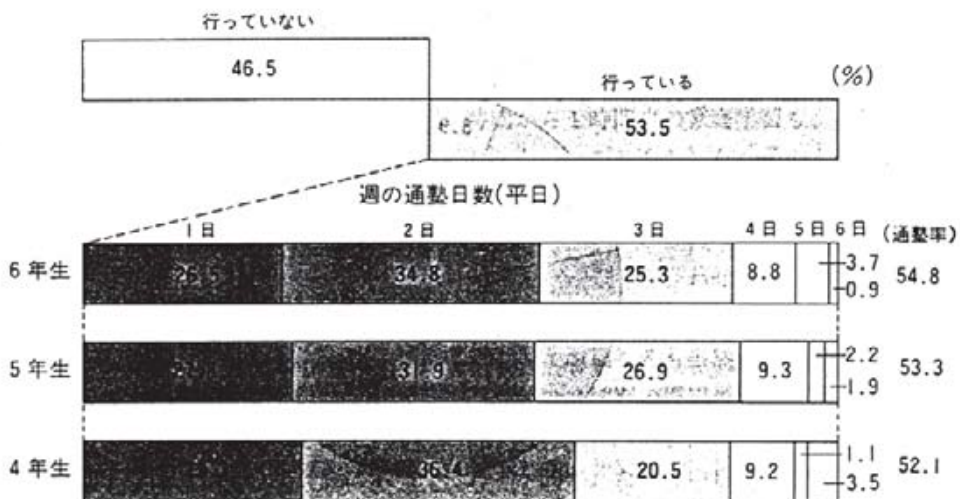
## 学習塾通いが54%

昔、学習塾には、先生や友人の目を避けて、密かに行ったものだと聞くが、今や（困ったことではあるが）第2の学校として子どもたちの間で市民権を得たかのような気配がある。本サンプルの通塾率は54%。3年前とはほぼ等しい数値である（図5）。そして、通塾率は4年52%、5年53%、6年55%とほとんど変わりなく、通塾日数の学年差が前回にもまして

少なくなっているのが特徴である。

5・6年で塾通いが激化するというよりも、4年生から塾通いが盛んになり、それが5・6年へと引きつがれていくようである。また、図6は、塾のある日の家庭学習時間だが、塾があれば、宿題をして終わりという子どもが半分。残りの半分は、塾と宿題の外に、さらに勉強もしている。モーレッツというより他は

図5・通塾の状況



ない。もっとも図7に掲げたように、通塾している子どものうち4割は、塾のための予習

もしている。だから勉強時間も増えることになるのだろう。

図6・塾のある日の家庭学習

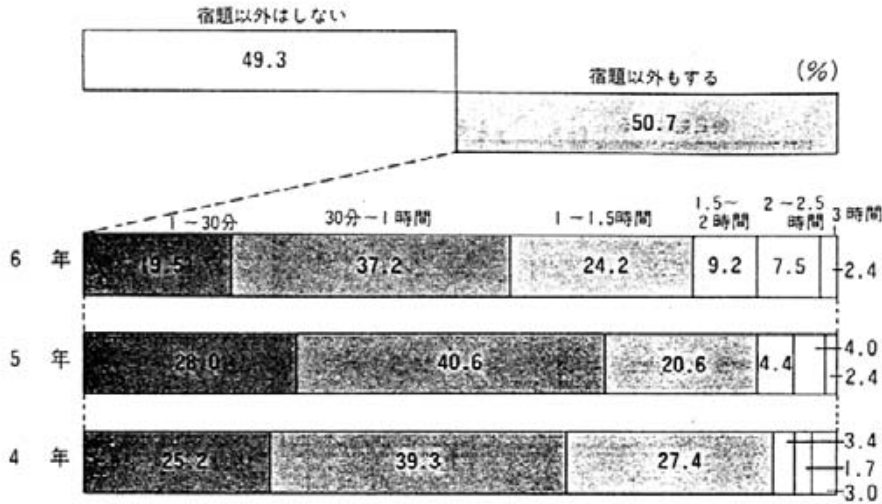
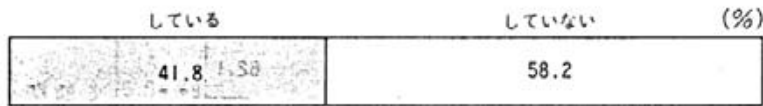


図7・塾の勉強の予習



## どんな勉強をしているか

「家に帰っても、宿題がないと勉強しないので、宿題をもっと出してください」という声は、よく母親の間から出てくるものの1つだが、実際に子どもは宿題がないと、そんなにも勉強しないものなのか。

図8を見ると、宿題がなくても「必ず何かを勉強する」子どもは、わずか34%。やったりやらなかったりが35%。つまり宿題がないとあまり(ほとんど)勉強しない子どもは、32%。3人に1人位は、いる勘定だ。母親の宿題への切望も、むべなるかなである。しかも図の下部に掲げたように、思ったより学年差が

ない。「宿題がないとあまり(ほとんど)勉強しない」子どもは、4年で34%、5年33%、6年29%と、微々たる減少率でしかない。

さてその家庭学習の内容だが、図9を見てみよう。勉強されている頻度の高い順に並べてみたのだが、書き取りと計算が1、2位で、読書、楽器の練習(おそらくピアノ等の練習)がそれに続く。以下の順位を眺めていくと、要するにあまり面倒な勉強はしない、ということのようである。家庭学習の内容は、こんなものでいいのだろうか。

次に図10は、4年と6年の家での勉強を比

較してみたものだ。4年のほうが6年よりもやっている項目は、読書、楽器練習、絵、工作、習字など。逆に6年のほうがやっているのは、漢字、計算の練習、算数の文章題、社

会科、理科の問題である。6年になると、国語や算数など、勉強らしい勉強が家庭学習の中身になってきている。

図8・宿題がなくても、何かの勉強をする

	毎日勉強する	ときどき勉強する	あまり勉強しない	ほとんど勉強しない
全体	33.5	34.7	19.0	12.8
6年	36.2	34.6	17.8	11.4
5年	32.9	34.5	20.0	12.6
4年	31.0	35.2	19.2	14.6

図9・家での勉強

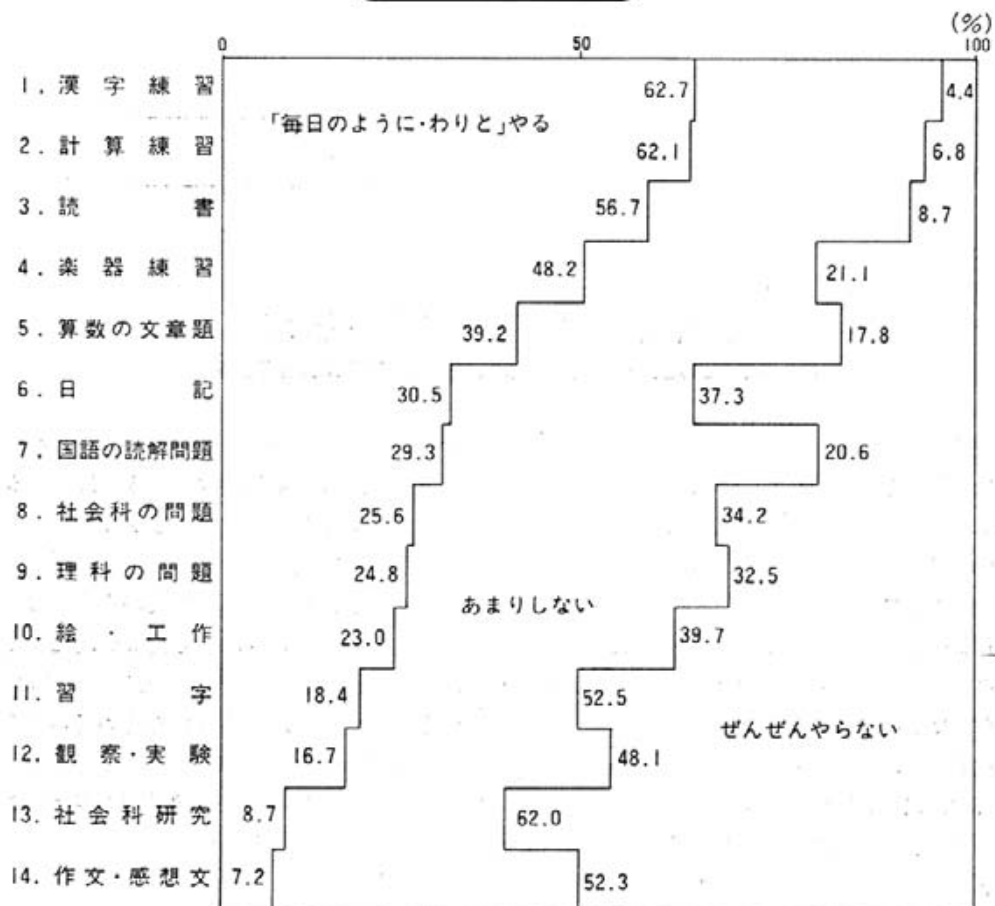
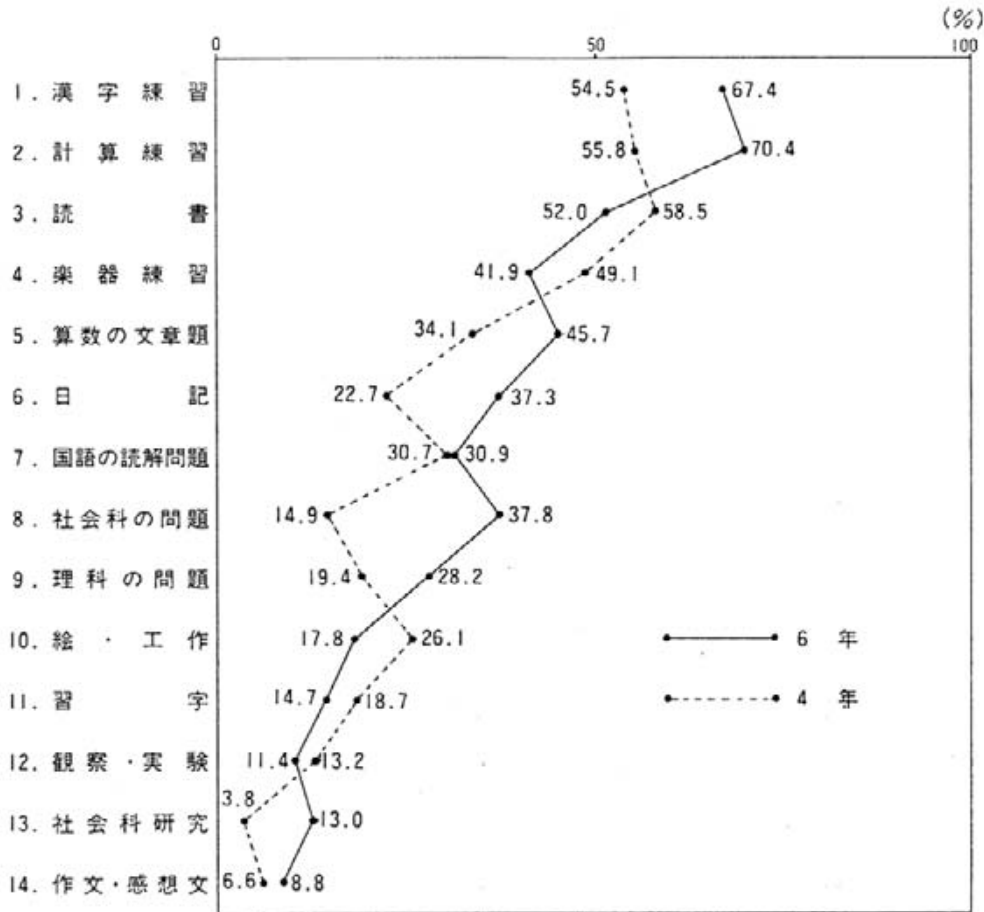


図10・家での勉強(4年生と6年生)



「毎日のように・わりと」やる子どもの割合

## 予習か復習か

家庭学習というと、予習か復習かが問題にされるが、子どもたちはどちらのスタイルで勉強しているのだろうか。

図11が示すように、復習中心という子どもが56%と半数を越える。予習を中心に勉強する子どもは2割にみえない。いちばん望ましいのは、予習・復習ともする子どもだろうが、このタイプは4年22%、5年26%、6年32%と学年を追って増加する。6年生ともなると、何の準備もないまま授業に臨んだのでは、授業が効果的に身につかない、ということがし

だいにわかってくるのだろう。

次にこれを教科別にみたのが図12・図13である。図12から、いちばんよく予習されているのは算数のようだが、それでも「必ずする」子どもが8%、「わりとする」子どもを含めても39%でしかない。本来予習を必要とするはずの社会・理科の教科ではさらに少なく、「あまり・ほとんどしない」子どもが4分の3もいる。

次に、子どもたちがわりと心がけてやっているという、復習について見よう(図13)。確かに予習に比べるとどの教科も復習をして

いる割合のほうが高い。教科で見ると予習と同じように最もよく復習されているのは算数であり、次に国語が続く。しかし、その算数で

さえ、「必ずする」子どもは13%でしかなく、「わりとする」子どもも含めてやっと5割でしかない。

図11・家での勉強法

	予習中心	復習中心	予習も復習も (%)
全体	17.1	56.2	26.7
6年	16.5	51.4	32.1
5年	16.4	57.6	26.0
4年	18.4	60.1	21.5

図12・予習

	必ず予習 していく	わりと予習 していく	あまり予習 しない	ほとんど 予習しない (%)
国語	6.7	28.9	41.3	23.1
算数	7.8	31.6	38.1	22.5
理科	4.5	17.0	41.4	37.1
社会	6.9	17.7	35.3	40.1

図13・復習

	必ず 復習する	わりと 復習する	あまり 復習しない	ほとんど 復習しない (%)
国語	9.6	34.8	37.4	18.2
算数	13.4	37.3	34.3	15.0
理科	6.0	19.2	40.6	34.2
社会	7.5	18.5	37.7	36.3

## ドリルの使われ方

家庭学習のいちばんポピュラーなスタイルは、おそらくドリルをやることだろう。子どもたちは、必ず何冊かのドリルを持っているに違いない。しかしそのドリルは、果たして効果的に使われているのだろうか。

図14でわかるように、ここでも国語と算数がダントツによく使われ、理科・社会はぐっと

使用率がおちる。しかし図15に示したように、ドリルを使うといっても、必ずしもそれが効果的に使われているのではない点に注意したい。ドリルを使って勉強した後での答え合わせを「しないほうが多い」子どもは2割もいる。「必ずする」子どもは、半分に過ぎない。これでは、何のためにドリルをやるのか、意味がな

図14・ドリル・問題集の利用状況

	とてもよく使う		よく使う		あまり使わない		ぜんぜん使わない	
					(%)			
国語	13.7	38.5	42.2	5.6				
算数	20.7	43.0	32.3	4.0				
理科	9.0	21.3	36.3	33.4				
社会	11.6	20.4	33.5	34.5				

図15・ドリルをした後で答え合わせをするか

	必ずする		する日としない日がある		しないことが多い	
	(%)					
全体	47.2	33.6	19.2			
6年	48.7	33.4	17.9			
5年	49.4	32.4	18.2			
4年	43.2	35.2	21.6			

いとも言えるだろう。

また図16は、ドリルをやっている、わからない箇所が出てきた時の処置である。「わからなければそのまま」が1割もあり、しかも図をよく見ると、学年を追ってその割合が少しずつ増えている。一部ではあっても、勉強がマンネリ化し、形式的に机に向かっているだけの子どもたちが、学年と共に増えていく気配は、見逃してはならない問題点だろう。

そして残りの9割の子どもたちの中でも、「わからなければ、必ず自分でわかるまで調べる」と言っている子どもは4割。残りの5

割は、どうやら時にはわからないままにしてしまうようすである。ここでも学習習慣の確立は、いまひとつ十分でないことがわかる。

この点は、宿題についても同様な傾向を見せる。図17によると、宿題をときどき忘れる子どもの割合は4年生よりも、むしろ5・6年になってからのほうが増えており、また宿題の答えがわからない時(図18)も、むしろ学年を追うにしたがって、「少し考えて、わからなければそのままにしてしまう」が、増えている。

図16・ドリルのわからないところ

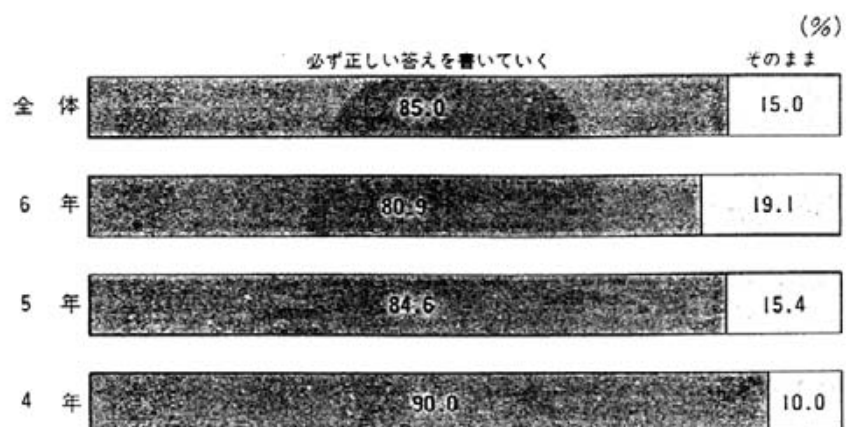
	わからなければそのまま	たいていお母さんに聞くか本で調べる	必ずわかるまで調べる (%)
全体	10.1	53.4	36.5
6年	11.7	52.2	36.1
5年	10.2	55.8	34.0
4年	8.1	52.2	39.7

図17・宿題を忘れていくことがありますか

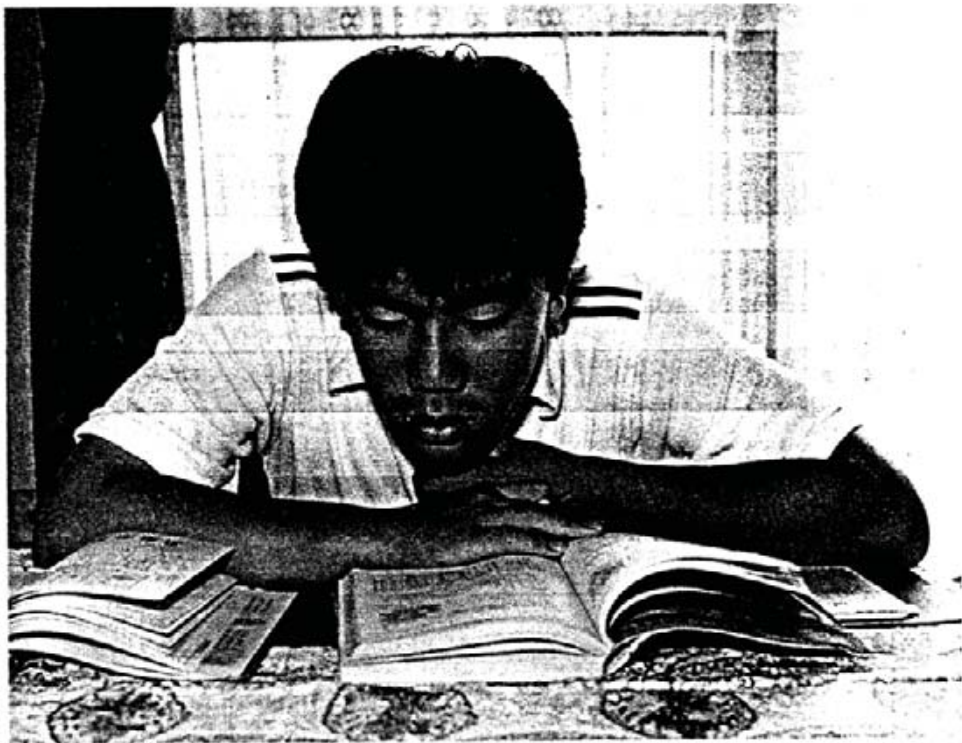
	しょっちゅう忘れる	ときどき忘れる	ほとんど忘れない	1度も忘れない (%)
全体	4.4	28.8	53.7	13.1
6年	5.0	31.5	51.1	12.4
5年	4.8	30.5	52.6	12.1
4年	3.5	23.8	57.7	15.0



図18・宿題(算数)の答えがわからない場合



## 2. 勉強の自立



### 親とのかかわり

さて、家庭学習の理想の姿は、子どもたちが自発的に計画的に、そして一定のペースで効率的な勉強のしかたをすることだろう。本サンプルの場合、どの位その理想の姿に接近しているのだろうか。

図19は、両親が勉強を見る度合いである。この場合の「勉強を見る」とは、聞かれたことに答える、といった程度のものでなくて、親がイニシアティブをとって（先生のように）子どもの勉強を見てやることを示している。図が示すように、サンプル全体としては、「毎日」いわば家庭教師の役割をとる親が5%、週に何日かが、2割、たまに見てもらうが5割、ほとんど見てもらわない子どもが2割という状況が見いだされる。

むろん学年を追って、自分で勉強する子ど

もの割合が増え、親がしだいに手を退いていくようすもわかる。しかし、6年生になっても、全く1人で勉強する子どもは4人に1人しかない。逆に毎日または週に何日かは見てもらおうという家庭教師的な役割をとる親も、同じく4人に1人いるようすには、少なからず驚かされる。最近の国際比較調査で、日本の親の特徴として「勉強のしつけ」だけにはうるさいが、他のしつけは甘い、という姿が指摘されているが、むべなるかな、という感じがする。

次に図20は、ドリル、問題集の選び方だが、これも学年を追って、1人で選ぶ、または友人にすすめられて（自分の判断でそれを採用する）という子どもの割合が増え、4年生では33%だったのが、5年で38%、6年生にな

ると62%と、ぐっと増えていくようすがわかる。しかしここでも見方によっては、6年生になっても、まだ3割は、親が選んで買って来

たドリルを使うという、自立の遅れが見いだされる。

図19・両親は勉強をみるか

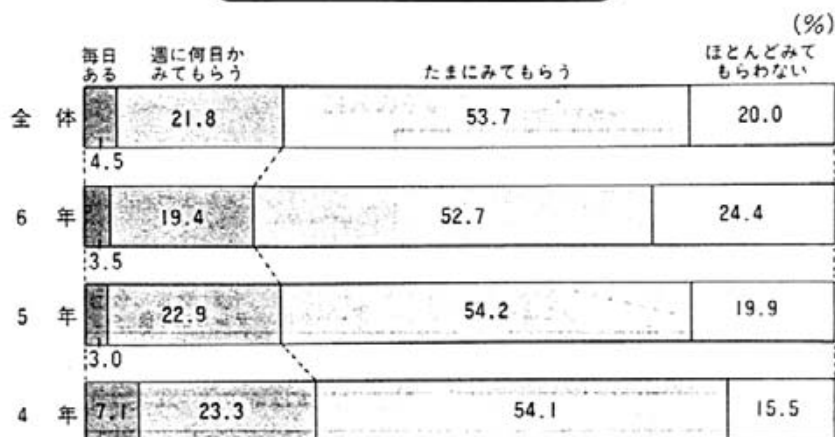
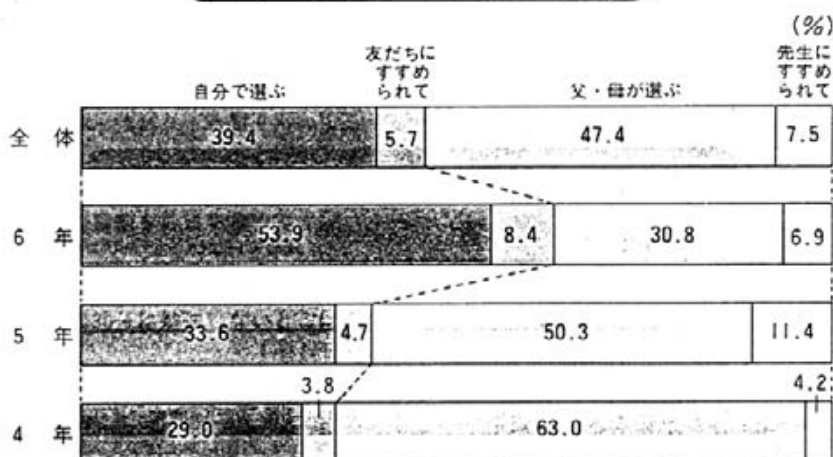


図20・ドリル・問題集の選び方



## 目標を決めているか

次に図21は、勉強の時間である。サンプル全体としては、家庭学習の時間を決めている子どもと決めていない子どもが半々である。この割合は、巻末の集計表に掲げたように、学年を追ってもあまり変化しない。子どもたちの学習方法の問題点の1つを示すものだ

う。また時間帯は、図の下部に掲げたように、4年生では夕食までに勉強する子どもが多く、しだいにそれが夕食後に移行していくようすがわかる。

また図22は、勉強を計画的にしているかどうかを見たものだ。「めあてを決めて勉強し

ついる」と答えた子どもは3割でしかなく、したがって図23に掲げたように、1日の時間割を作っている子どもも、週の時間割を作っている子どももごく少ない。多くは行きあたりばったりなのであろう。

しかし表1に掲げたようにめあてを決めて

いると答えた子どもの中には、自立的な学習態度の芽生えとも言えるような項目が並び、なかには5のように、「ドリルを4科目し、問題集の国語を2ページと社会、理科を読み、英語テープを聞き、算数の塾の宿題をやる」というモーレツなものも出てきている。

図21・勉強時間を決めているか

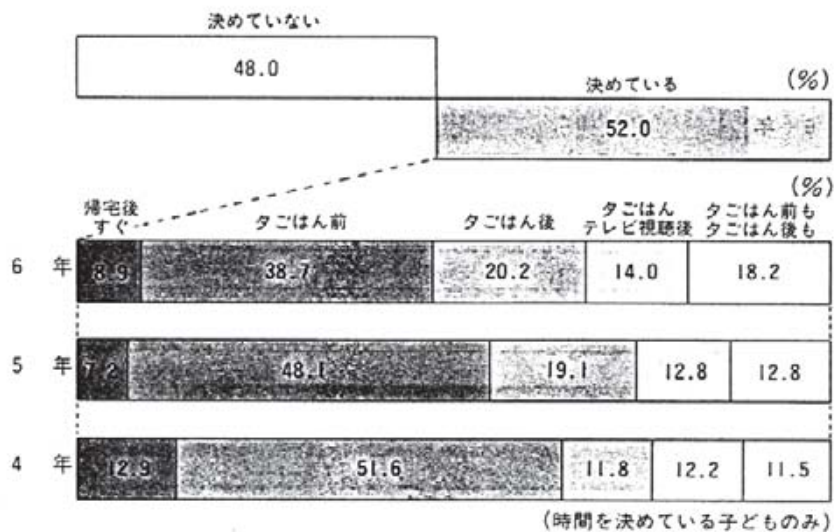
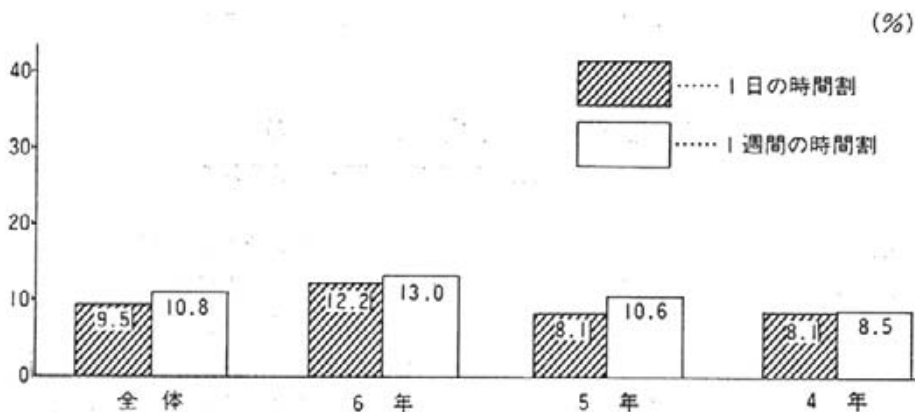


図22・目標(めあて)を決めて勉強しているか



図23・1日の時間割と1週間の時間割を作っている子



しかし全体としてはこの時期には、あまり自立的で自発的な学習態度が育っているとは言えないようである。図24に示したように、(かりに勉強の子定をたてても) 必ずやり通す子どもは2割、わからない時は辞書などを

使っていつもきちんと調べる子どもも同じく2割、勉強したことをノートにまとめる習慣を確立している子どもも1割強でしかない。これらの数字を見ると、家庭学習の指導にもっと配慮するの必要を感じてしまう。

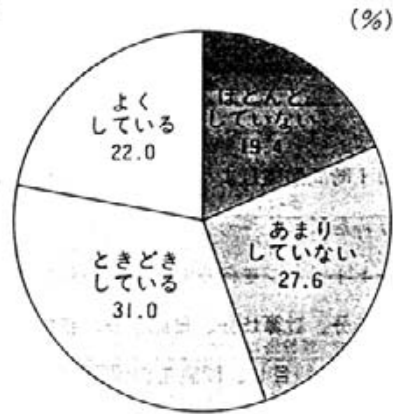
**表1・家で勉強するときの目標(めあて)(抜粋)**

——24人の子のケース——

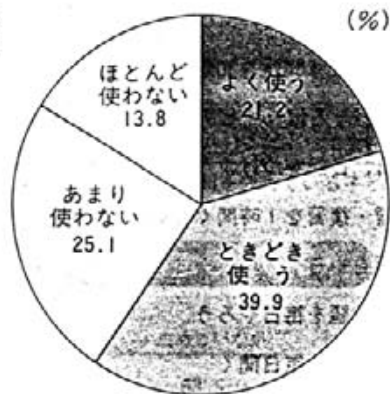
1. 毎日1時間勉強しよう
2. ドリルを毎日2ページ
3. ノート1ページを何をしてもいいからうめる
4. 漢字15分、計算15分、日記15分、自由勉強15分やる
5. ドリルを4科目し、問題集の国語を2ページと社会、理科を読み、英語テープを聞き、算数の塾の宿題をやる
6. 計算と漢字を1日交代で30分ずつやる
7. 算数の計算問題を30題
8. 毎日、そろばん・ピアノをやる
9. 毎日、日記をつけよう
10. 予習・復習を1時間ぐらいする
11. 宿題をやろう
12. 塾の宿題を毎日やろう
13. 基礎英語を毎日聞く
14. 1日30分は勉強しないとごはんを食べない
15. 苦手な勉強を中心にやる
16. 時間を有効に使い、その日に決めたことはやってしまう
17. わからないことをわからないままにせず、わかるようになるまでやる
18. 勉強は集中してやる
19. 毎日、1時間は机に向かう
20. 時間を多くやるよりも毎日少しずつやる
21. 1つの勉強に集中してやる
22. 問題集を1年間で終わらせる
23. 毎日読書する
24. ふざけないで、真剣にやる

図24・学習の態度

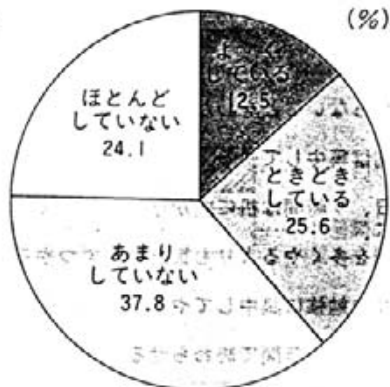
予定した勉強は、どんなに  
ねむくてもやりとげる



わからない問題があった時  
参考書や辞書などをつかう



勉強したことをしっかりおぼえるために、ノートにまとめている

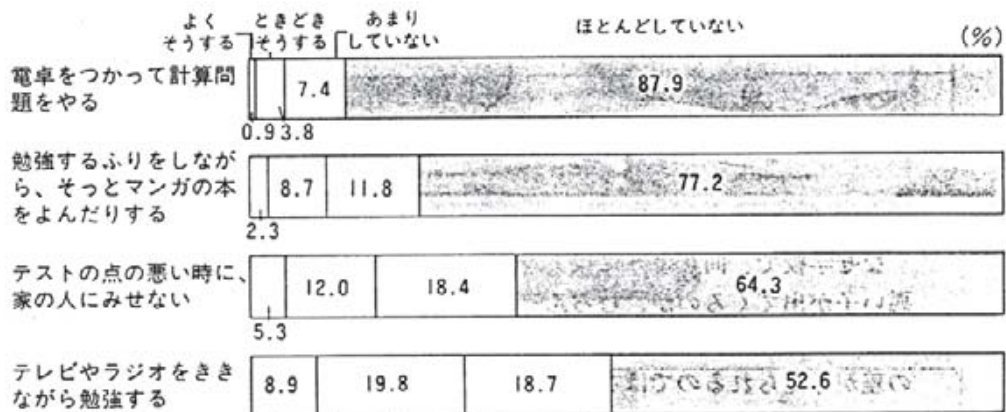


## 意外にマジメな勉強ぶり

しかし他方こんな数字もある。図25は、勉強や成績をめぐる、ちょっぴりズルをしたり、ふまじめだったりすることがないかどうかをたずねた結果だ。どの項目でも子どもたちは「ほとんどしていない」と答えており、わずかに見られるのは、「テレビやラジオをつけながらのナガラ勉強」だけである。子ども

たちは予想外にマジメに勉強している、と言えそうである。ただしマジメということと、勉強のしかたがわかっている、正しい学習習慣が身につけている、自発的に勉強している、ということとは別なのは、言うまでもないだろう。そこに子どもたちの家庭学習の指導の必要性が生まれてくると思われる。

図25・ずるい勉強のしかた



### 3. 成績のよい子・悪い子



なぜ学校で、同じように授業をうけていながら、成績のよい子と悪い子が出てくるのか。むろん一つにはその子どもの生まれつきの能力の差もあるだろう。しかしもっと大きい条件として、学習態度の差が考えられるのではないだろうか。ここでは家庭での学習に限って、その態度の差を見ていくことにしよう。

#### 一般化した塾通い

すでに第1章で、子どもたちの5割強が、学習塾へ行っているようすを見てきた(図5)。しかし塾へ行っているのはどんな成績の子どもたちなのだろう。図26は、成績と通塾率との関係を見たものだ。

図が示すように、成績が「うんと下」の子どもたちを除いて、ほとんど通塾率に差のないことがわかる。3年前のデータでもこの傾向は見いだされたが、その格差はいっそう

ちまった感じで、通塾が日常化し一般化してしまっているようすがわかる。

このことは図27からも見てとれる。図が示すように、塾の子習・復習をする子どもは、成績上位群で57%と半数をわずかに越えているものの、他の成績層では、4割前後と、ただ塾になんとか行っているに過ぎない状況が見いだされる。塾もそれなりの効果をあげるためには、学校と同じように、きちんとした



子習や復習が必要であろう。これでは学力をつけるというよりも、塾へ行っているという安心感だけのために、貴重な時間をさいてい

るようなものと言われても、仕方がないのではないか。

図26・成績×通塾の状況

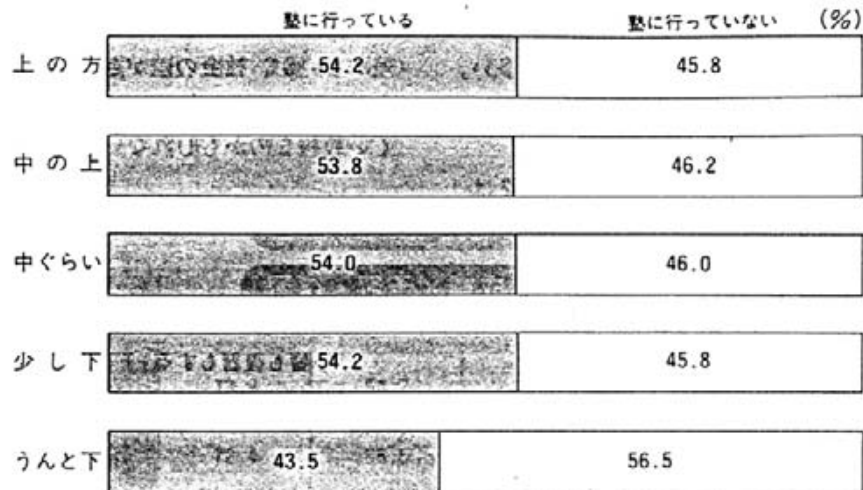
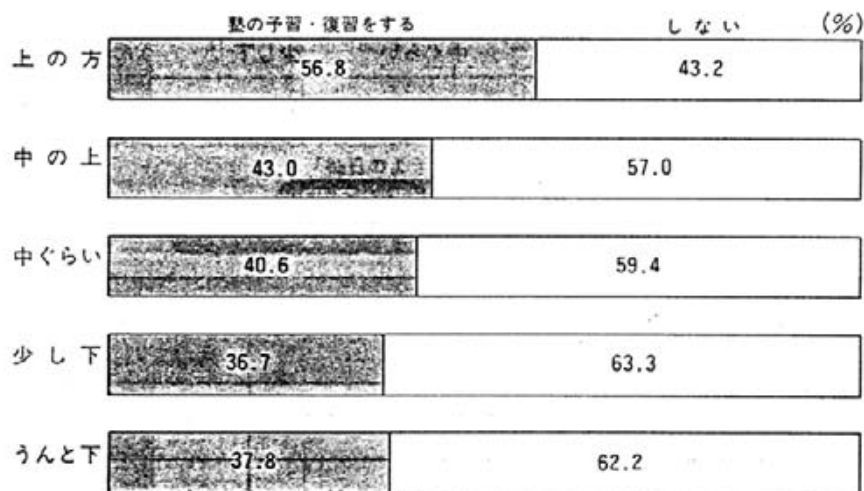


図27・成績×塾の勉強



## 成績と予習・復習

では学校の勉強の予習・復習はどうか。図28に掲げたように、一応成績のレベルとの関係は見いだされる。とくに成績が上もしくは中の上のグループは、他のグループより、「予習・復習の両方ともしている」子どもが多い。中の上以上は、それなりにしかるべき家庭学習のしかたをしていることがわかる。

ではそれを教科ごとに見てみよう。表2は

予習に例をとって、各グループの子習ふりを見てみたものだ。4教科とも、「中の下」「下」のグループの子習ふりがとくに悪い。また国語・算数・理科は各グループで、それほど大差がないが、社会の差がきわめて大きいことも興味深い。つまり社会は一人では勉強しにくい教科なのかもしれない。

図28・成績×予習・復習

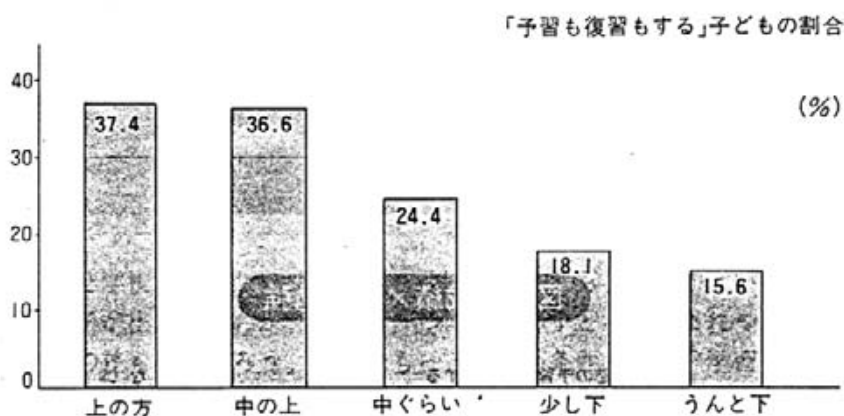


表2・成績×予習

(%)

項目	成績				
	上の方	中の上	中ぐらい	少し下	うんと下
国語	40.1	40.8	37.6	24.2	21.1
算数	47.6	47.8	39.8	28.6	18.3
理科	29.4	28.4	20.0	13.8	14.7
社会	34.8	29.6	25.2	15.3	8.6

数値は「必ず・わりと予習していく」子どもの割合

## 何を勉強しているか

表3は、成績と家庭学習の内容を見たものだ。どの勉強についても、成績のよい子どものほうがより多く勉強していることがわかる。また数字に開きが出る部分を太線でくくってみたが、成績上、中の上、中の3群と、中の下、下の2群では、大きな断層があることが見いだされる。上から中まではそれなりに勉

強をしているが、中の下以下は、勉強ぶりに目立った落ち込みがあると言えそうである。

次に表4は、ドリルの活用のしかたである。どの教科も、上や中の上の子どもたちは、同じ位ドリルを使っているが、中以下の子どもたちが、ドリルをそれほど活用していないことがわかる。

表3・成績×家での勉強

(%)

成績 項目	上の方	中の上	中ぐらい	少し下	うんと下
漢字練習	73.9	64.7	65.0	50.3	52.8
計算練習	72.4	66.5	65.5	45.7	43.2
読書	68.4	67.5	56.8	43.0	42.9
算数の文章題	51.7	50.3	38.7	23.0	30.5
社会科の問題	33.7	28.1	26.8	17.1	16.7
理科の問題	31.6	32.9	23.7	16.0	19.4
国語の読みとりの問題	28.7	35.8	30.7	19.0	27.7

「毎日のようにする・毎日ではないがわりとする」子どもの割合

表4・成績×ドリル・問題集の活用

(%)

成績 項目	上の方	中の上	中ぐらい	少し下	うんと下
国語のドリル・問題集	61.6	60.5	54.3	39.5	22.6
算数のドリル・問題集	75.3	71.2	64.6	50.5	39.3
理科	37.7	39.9	30.0	19.8	13.0
社会	37.4	40.8	33.1	17.8	23.9

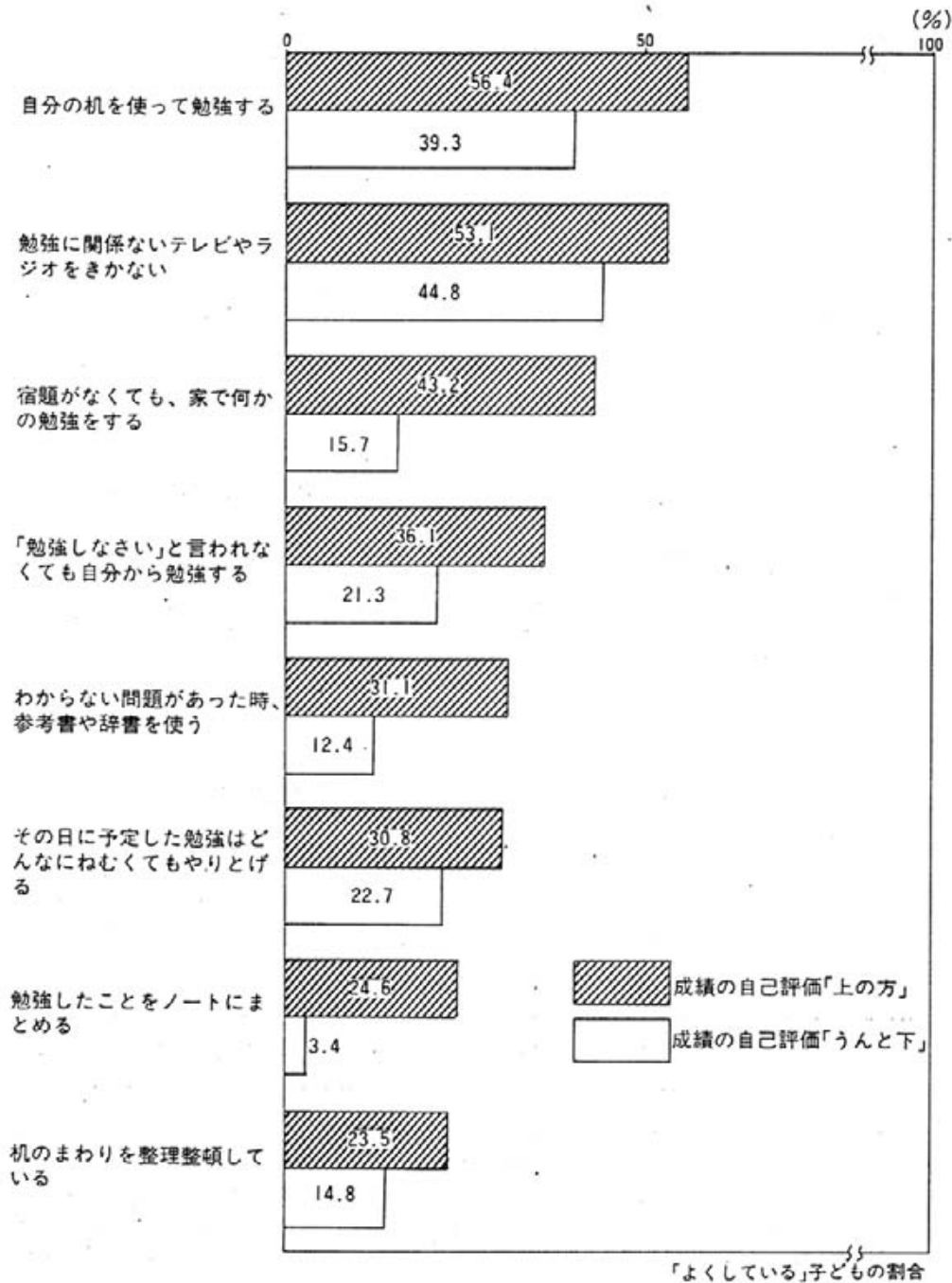
「とてもよくつかう・よくつかう」子どもの割合

## 学習態度について

図29は、さまざまな学習態度について、成績上位群と下位群（中間層を除く）とを比較

したものである。図に明らかなように、すべての項目について、成績のよい子どもは、悪

図29・成績×学習態度



い子どもより望ましい学習態度を確立している。とくに、「宿題がなくても家で何かの勉強をする」子どもは前者が43%、後者が16%。「わからない時に参考書や辞書を使う」子どもが31%と12%、「勉強したことをノートにま

とめる」子どもが25%と3%、のような項目で、差が大きい。これらができるかどうか、ある程度成績の良し悪しを左右していると考えても、よさそうである。

## 自発的に勉強する子ども

さて前に掲げた図29の中に「宿題がなくても何かの勉強をする」の項目があったが、このように、いわば自発性に支えられた勉強ができるようになることが、児童期における一つの目標であり、発達課題であると考えられる。むろんそうなれば成績も上がってくるだろう。

そこでこうした自発的な学習態度を身につけた子どもとそうでない子どもとの、学習のしかたを少し比べてみることにしよう。

図30が示すように「宿題がなくても毎日必ず何か勉強する」子どもだが、目標を決めて勉強している子どもの中では53%もいるのに、

宿題しかしない子どもの中ではそれが6%。大差である。

また図31が示すように、「ドリルをしたあとで答え合わせを必ずする」子どもの割合は、毎日勉強する子どもでは55%、宿題しかしない子どもではそれが半分の29%。

さらに表5にまとめたように、すべての項目において、自発的に勉強する子どものほうが、宿題しかしない子どもよりも、望ましい学習のパターンをもっていることがわかる。

早くこうした態度を身につけさせることの大切さが実感される結果である。

図30・宿題がなくても勉強するか×勉強のめあて

	めあてを決めている	めあてを決めていない (%)
毎日勉強する	53.1	46.9
ときどき勉強する	27.6	72.4
あまり勉強しない	16.8	83.2
ほとんど勉強しない	5.8	94.2

図31・宿題がなくても勉強するか×ドリルの答え合わせ

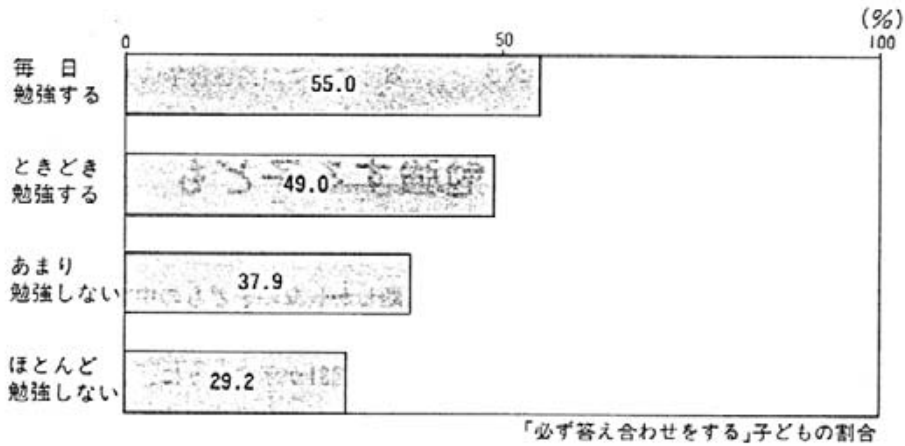


表5・宿題がなくても勉強するか×学習態度

項目	尺度	割合 (%)			
		毎日勉強する	ときどき勉強する	あまり勉強しない	ほとんど勉強しない
自分の机を使って勉強する		68.0	47.2	34.1	29.4
テレビやラジオを聞きながら勉強しない		67.8	49.7	40.5	37.5
「勉強しなさい」と言われなくても自分から勉強する		43.0	17.9	10.5	9.3
予定した勉強は、どんなにねむくてもやりとげる		35.0	16.9	15.3	12.0
わからない問題があった時、参考書や辞書を使う		31.6	20.8	12.9	7.7
机のまわりの整理整頓をしている		28.6	25.6	17.1	12.4
勉強したことをノートにまとめる		21.2	9.8	6.6	6.4

「よくしている」子どもの割合